

■ OnAir 3000 ユーザーレポート

横浜エフエム放送株式会社 様

OnAir 3000



Fm yokohama 84.7

DスタジオとEスタジオを OnAir 3000 で更新



横浜エフエム放送株式会社
技術部
柳山 和人

Dスタジオ & Eスタジオの更新

平成5年の横浜ランドマークタワーへの本社移転以来、約20年間音声卓を保守しながら使用していましたが、そろそろ保守も困難になり、5つあるスタジオの内、録音スタジオであるDスタ、Eスタの更新を平成25年1月に行いました。

費用とシステムの観点から、当初はOnAir1500クラスのものを検討し、デモ機をお借りして他社製品とも比較しつつ、協力会社のミキサー全員で機能等を確認したのですが、このクラスの製品はコストパフォーマンスに優れたものの、更新する録音スタジオで使用するには、拡張性、直感的な操作性の面でやや不満が出てしまいました。



他社の卓にもそれぞれ長所はありましたが、ミキサー陣からの意見でロータリーエンコーダーの反応が最も実際の運用に適しているスチューダー製品の上位機種で再検討しました。必要とする音声入出力、GPIO数を考慮するとOnAir 3000が最適でしたが、当然OnAir 1500で検討していた際の費用とはかけ離れてしまいます。しかし、次回更新までのスパンや、何よりスタジオで作業する人にストレスなく番組を制作してもらうためにもOnAir 3000を採用することとし、費用については工事を自社で行うことにより増加分を極力抑えることにしました。

構成は、ロータリーモジュール、フェーダースクリーンモジュールを割愛して、フェーダーモジュールのみで、18フェーダー、8 MIC、8 LINE、16 AES/EBUとしました。スタジオの規模を考えると12フェーダーに抑えたかったのですが、アサイン変更せずにほとんどのオペレーションができるように、あえて18フェーダーを選択しました。

放送局での音声卓は、美しくデザインされた机にフェーダー等のモジュールが落とし込まれているのが一般的と思いますが、今回は機の製作の手間も考え、割り切ってBOXタイプのものを机の上に置くことにしました。更新した録音スタジオは、ワンマンでのナレーション収録や編集、完パケ作業を想定して設計されたアナブースが無いス

タジオですが、最近ではスタジオスケジュールの都合で、通常の番組を収録することも多くなっており、フェーダーモジュールとコアユニットとの接続はLANケーブルだけなので、BOXタイプを選択したことによりスタジオ内で音声卓を容易に動かすことが出来ます。したがってレイアウト変更が簡単に行えるので、将来的には出演者とディレクター・ミキサーを対面式にしたり、隅に寄せてライブ演奏の際にはスタジオを広く使用するような運用を可能にすることも考えています。

実際の運用ですが、見た目がシンプルな音声卓となっているので、番組制作者も身構えることなく、A4の操作方法のマニュアルを1枚渡すだけで使用出来ています。反面、フェーダースクリーンが無いために各フェーダーの状況が一見してわからないため、作業の前後には必ずデフォルトとして設定したシーンを呼び出すようにして、トラブルを防ぐようにしています。

OnAir 3000を導入してから約10ヶ月経過しましたが、非常に順調に運用できております。スチューダー・ジャパン・ブロードキャスト(株)ご担当者様に設定等でご尽力いただき、自社で実施した工事でも、各スタジオ実質2日間で行うことができました。深く感謝しております。工事に協力いただいたスタッフの皆様も、ありがとうございました。